



土木史フォーラム

Newsletter of Committee on Historical Studies in Civil Engineering
Japan Society of Civil Engineers

No. 7 1997.12.

目次	見出し / 執筆者	掲載頁
土木史ニュース	アプトの道ー碓氷ルネサンス・トレイル	小西 純一 1
フォーラム	土木史の教育について	長弘 雄次 2
地域のニュース	阿武隈川に残る江戸時代の流路	3
	布引ダムの補修工事	3
海外土木史	イギリス土木学会アーカイブスの日本関係資料	4
関連学会ニュース	産業考古学会／技術史教育学会／	5
	歴史文化学会／新宿300年委員会	5
学会の動き	第52回年次学術講演会／第20回土木計画学研究発表会	6
土木文化財	土木文化財の現状と文化財登録制度	堀 勇良 7
行事業内	IPHS（国際都市計画史学会）国際コンファレンス	8
土木史関係図書	『愛知の歴史街道』	8

土木史ニュース

「アプトの道ー碓氷ルネサンス・トレイル」

ー歴史的な線路敷を遊歩道として再生するー

1997年10月1日、高崎・長野間の新幹線が開業し、東京・長野間は1時間40分前後で結ばれることになった。これと引き換えに並行在来線が9月30日限りで廃止された。すなわち、横川・軽井沢間の碓氷線は廃止され、軽井沢・篠ノ井間は第3セクターのしなの鉄道に移管された。

碓氷線の悲劇は幹線輸送を特殊な牽引方式に託したことにある。かつてのアプト式もその後のEF63形重連補機使用の粘着式も、鉄道ファンならずとも興味をそそられる存在であったが、その特殊性ゆえに、ついに路線そのものを失う時が来てしまったのである。

ところで1963年秋に廃止となったアプト式線路のうち、1966年複線化開通でも改築されずに、廃線敷のまま残った丸山・熊ノ平間には、碓氷第一から第十までの10か所のトンネルと碓氷第二から第六まで5つの橋梁など、主要な煉瓦造構造物が含まれていた。その中に、日本最大の煉瓦造りアーチ橋である碓氷第三橋梁（碓氷川橋梁）があったのは幸いであった。国道の直ぐそばに聳え立つ、高い橋脚を持つ4径間の煉瓦造りアーチ橋は一般の人々にも強い印象を与え、足（車）を止めてしばし眺める人が多かった。

碓氷線廃線敷の構造物や保存車両などを鉄道文化財と位置づけて、地域振興に役立てようと、群馬県高崎財務事務所と松井田町が「信越本線横川駅周辺鉄道文化財」調査を実施したのは平成元年度のことであったが、その後、文化庁主導の「近代化遺産」調査が群馬県で行われた。

開業から100年目、廃止から30年目の1993年8月に、煉瓦造アーチ橋5基からなる「碓氷峠鉄道施設一構」が近代化遺産として国の重要文化財に指

定された。翌1994年12月にトンネル10か所、変電所2棟と旧線路敷が追加され、所有者である松井田町が管理することになった。

松井田町は平成元年度より、「峠ルネサンス」をテーマに碓氷峠を中心とした歴史、文化、自然を生かしたまちづくりに取り組んでおり、その一つとして遊歩道のネットワーク形成を図る「碓氷ルネサンス・トレイル」整備計画がある。碓氷線廃線敷も、トレイルの一つ「アプトの道」として活用しながら保存してゆく計画で、歴史的な鉄道構造物および周囲の自然環境にマッチした遊歩道に整備するべく、本年度から工事が始まった。現在、峠の入口に相当する第一トンネルから碓氷湖に接する第二トンネルまでの約800mの整備が進んでいる。第一トンネル入口付近では、すでに切り土部分を埋め立てていた土砂が除去され、その中に埋没していたトンネルポータルが20年振りに、切石積の立派な姿を現している。

（信州大学 小西 純一）



久し振りに姿を現した第一トンネル入口

土木史の教育について

長弘 雄次（九州共立大学名誉教授）



昨今地球環境の保全が世界的にクローズアップされ、我々土木に携わる者も自然環境を大事にしながら土木構造物を建設することが重要な課題となってきた。そのため過去高度成長期に推進された国土改造の大型工事は敬遠され、自然環境の保全を考慮した構造物の構築が望まれる時代要請となってきた。

このため先人が残した貴重な土木遺産から学ぶことが多くその保存が望まれ、土木学会においても土木史研究者の長年にわたるたゆみない努力によって、学会誌にも自然景観の保全、土木遺産の掘起こしなどの記事が多くなり、土木史研究の重要性が認知されつつあることは、誠に同慶に堪えない。しかし第一線の研究者、工事関係者の中には新技術の開発や大型工事に目が向き、土木遺産や土木史研究をややもすれば軽んじる傾向があるのは残念なことである。

国家百年の大計は教育にあるといわれる。戦後の経済至上主義は国民に物質的な豊かさをもたらしたが、冷戦時代の終結とともに政治体制の混迷は人々に不安を与え、その価値観が問われており人間の心の問題に突き当たっており、国もそのことによりやく気付き文部省も心の教育を取り上げ始めている。

人類は困難に立ち至った時、国・団体・個人を問わず必ず歴史を振り返り、先人の残した教訓に学び未来に向かって前進する。市民生活環境を改善するための土木工学も例外でなく、拡大主義・廃棄物等の処理に悩まされ、材料のリサイクルや環境との共生など大きな転換期にある。

私は土木工学を目指す学生諸君に先ず『土木史教育』を推進することを提唱したい。新鮮な若者時代に土木史を学ぶことによって、先人の苦勞して構築した土木遺産の歴史を学び、その時代背景の計画・施工の建設に従事した人々の自然との闘い共生の心を会得し、土木技術者として社会で活躍する心構えを身に付けさせることが大切と考えるからである。

現在土木事業で活躍している人が土木史に理解をもたれるよう努力することも必要であるが、学生時代に土木史の必要性、土木遺産保存の重要性や土木工事の自然環境保全の心構えを認識させることが、長い目で見て最も効果的であると思う。

筆者が数年前九州の各大学で先駆けて従来各科目毎に一部講義がなされていた土木史の教育を、カリキュラムに「土木史」を一単位取り入れ半年間講義を行なった経験から痛感したことである。

この内容は土木史研究第15号に記載しているが土木史を学ぶことによって、学生は土木人としてあるべき基礎的な教養を身につけ、生まれ育った郷土の土木遺産を誇りにし、郷土愛、隣人愛に目覚め心の教育、地球自然を大事にしながら、これを根底に研究、構造物の建設を考える手法を身につけるようになる。

土木史教育を受けた学生が社会に巣立ち、謙虚な心を持って社会の中堅として活躍するときに初めて地域の人々が土木に親しみをもち、自然と調和した構築物に共感し、土木遺産の保存に積極的に協力する気運が高まることであろう。

半年間土木史の教育をした結果学生81名に対するアンケートでは、建設工事は環境と開発が共存83%、自然環境優先14%と両方で97%を占め、利便性優先は3%の僅少に過ぎなかった。また土木遺産の保存については是非必要62%、必要なら保存が35%、両方で97%を占め、壊しても止むをえないは僅か3%に過ぎなかった。講義終了後の学生の土木工学に対する認識については①土木工学の全体像と各専門科目との関連性の認識②土木の歴史的遺産保存の認識③土木工事は開発と環境保全共存の土木技術者としての心構えの認識、などが心に刻まれたようである。これらの学生が将来社会で活躍するときの成果を期待したい。

鉄は熱いうちに打てという。土木工学を学び始める無垢の学生に土木史の教育を体系的に行なうことによって、将来成果があらわれるものと考えるが、全国の大学・高専の土木系学科が建築学科の建築史同様にカリキュラムに土木史を取り入れ片手間でなく、本格的な土木史の教育が推進されることを願うものである。

この場合特に必要なことは、土木史を担当する教官・教員が土木工学全般に通じている経験者或いは土木史を専攻している方々によって行なわれることが望ましく、また土木史観として思想的なものが入ってくるので、その中立性をわきまえた土木史の教育が実施され、健全な土木技術者の育成がなされることを切望するものである。

地 域 の ニ ュ ー ス

阿武隈川に残る江戸時代の流路

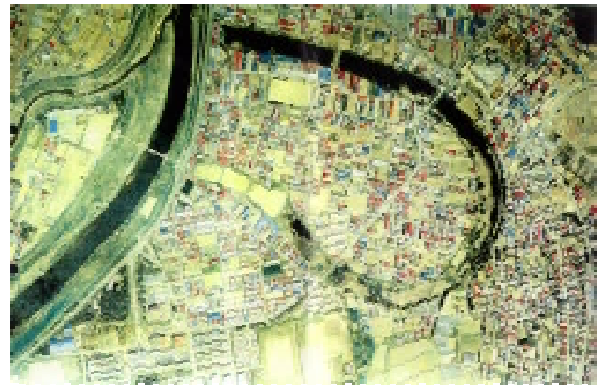
今日、石垣以外の江戸時代の土木遺構はなかなか目にし難い状況にあって、阿武隈川には江戸時代の姿を今に伝えている場所がある。

阿武隈川の近代河川改修は大正8年から始まる。それ以前の流路は奥羽山脈と阿武隈山地に挟まれた低地を蛇行しながら北流し、洪水時にはその周辺が遊水池となっていた。近代の改修では洪水の疎通を早めるために、蛇行部のショートカット、堤防の嵩上げ、新規築堤などが行われた。

この大改修で幸運にも取り残された流路が郡山市に残っている。それは日本大学工学部の即北側にあり、今日、古川池（または馬蹄形）と呼ばれている（面積約13ha）。沿川には高木が並び、江戸時代の様子を彷彿とさせてくれるが、新旧の流路を比較すると、脇の新堤防は河床から約8mの高さに対し、旧流路では3m程しかなく、近世の河道の意外な小ささに驚かされる。この蛇行部は奥州街道からの脇街道が横断するための「金屋の渡し」があった所であり、松尾芭蕉も渡ったという由緒もある。現在の古川池へは小河川と生活雑排水が流入し、末端の阿武隈川合流部付近は遊水池となって釣りを楽しむ人々が散見できる。この旧河道については最近、郡山市が「清流を取り戻し市民の憩いの場として再生する」計画を起こし、平成14年度を目途に改修が始まろうとしている。

近世の流路跡にも今や近代技術の手が加わりつつある。そこには自然や歴史への配慮がとりあえずなされているが、遺構と見なせば改変行為である。土木遺産の改修では、公共財産でもあり、単純にそのまま後世に伝えたいという情緒的希望を叶えることができないことも多い。他の歴史的文化財と同様に土木構造物を遺産としてそのまま残すには、文化財としての土木構造物の定義や保存方法の確立と、その広い周知が早急な課題である。改変、撤去の場合は、せめて記録だけでも正確に残しておくことも必要となろう。

（日本大学工学部 知野 泰明）



上空から見た古川池
(左側の流路が現阿武隈川)

布引ダムの補修工事

神戸の玄関口山陽新幹線新神戸駅から登山道を30分位歩いたところに布引ダム（正式には五本松堰堤）がある。

このダムは1900（明治33）年ちょうどに完成した日本最古の重力式コンクリートダムであり、これまで関東大震災を契機とした耐震性の検討、堤体からの漏水対策、堤体の構造検討など4回に渡って調査・補修が行われてきた。

阪神大震災に遭遇し、直ちにダム調査研究会（委員長：田中 茂 神戸大学名誉教授）を開き、被災状況の把握と今後必要な対策の提言をうけた。

提言の要旨は、①堤頂部の土間コンクリートや高欄でひび割れ発生などの被害はあったが構造的に致命的なものではない。②しかし、漏水量が震災以前に比べると2～4倍に増えたため、早急にグラウト工事を実施する必要がある、③将来的には堤体上流側にフィレットを増築することが望ましいというものである。

グラウト工事は、今年3月まで約1年半の工期

で施工され、454tのセメントミルクを注入し、漏水量を震災前の状態に戻すことができた。

今後は、恒久的な対策としてフィレットの工事に向け調査をスタートさせ、100歳となる21世紀には土木遺産と新しい技術のマッチした新たなダムとして生まれ変わらせる予定にしている。

（神戸市水道局浄水課長 佐渡谷 伸夫）



現在の布引ダム（正式には五本松堰堤）

イギリス土木学会アーカイブスの日本関係資料

1818年に設立されたイギリス土木学会 (The Institution of Civil Engineers) は、1828年国会議事堂近くの重厚な建物に移り現在に至った。1階が会長室の他、コンファレンス室、会議室、学会書店などで、2階が講堂と図書館で、地階がアーカイブスである。

これまで、イギリス土木学会のアーカイブスでは、明治期にお雇い外国人として来日したイギリス土木学会会員が持ちかえた日本関連の資料が保存されていると言われていたが、詳しい内容は日本では紹介されていなかった。幸い今回訪問の機会を得たので資料の調査を行った。

時間は極めて限られており、全体をざっと眼を通し、今後の詳細な調査の糸口とすることを主眼として主だったもののリストの作成のみに留まった。

主な資料としては、全体的に鉄道関係のものが多く、トレヴィシックが設計し、新橋工場や神戸工場で製作された機関車、貨車などの図面が目立つ。これらの中で、明治天皇のお召し列車の図面の原図が含まれる。神戸工場で製作された原図となったものと思われ、縦500mm×横1200mmほどの大きさで、"State Carriage for H.I.M the Tenno of Japan built at Kobe Works Japan" とのタイトルがある。

また、鉄道寮神戸工場の平面図の原図もかなり傷みは激しいが残されている。パラフィン紙で折り目に沿って切断しており、触れると更に損傷を与えそうな状態である。神戸工場は新橋工場とならんで、初期の国産の鉄道桁橋を明治10年代以降製作した工場である。創業当時と思われる京都駅舎の図面原図 (200mm×500mm程度) や、かなり傷んでいるが、敦賀～長浜間の建設当時の全国鉄道路線図 (MAP railway in Japan 700mm×700mm程度) も保存されている。

この他の鉄道関係資料としては、日本の鉄道建設に係わったイギリス土木学会会員の鉄道建設の進捗を論文にまとめて学会に提出した際に添付した手書きの手紙などが残されている。ホルサムの手紙

(1887.8.12)、パウナルの手紙 (1891.1.28)、ベーカーの手紙 (1897.4.8) などであり、これらはいずれもオリジナルである。

一方、水道関係の資料として、神戸の布引五本松ダムや取水堤、浄水施設の建設に関する資料がある。この資料はよく整理されており、ダムの断面図、応力図などの他に、1898年から1900年頃までの建設中のダム、雌瀧取水堤、奥平野、北野浄水場、導水鉄管敷設工事や水路橋の工事中的の写真20点が含まれる。この資料には、当時建設に係わった佐野藤二郎が工事の完成後に論文としてまとめてイギリス土木学会に提出した "The Kobe Waterworks" の原稿も含まれる。この論文は結局採用とはならなかったようで、1ページ目に手書きで "Ordered by the Council to be abandoned, 23.4.7" (委員会の決定により不採択、1907.4.23) とある。

これ以外には、柳ヶ瀬トンネル関係の書類やJ.ミルンらによってまとめられた1891年の濃尾地方地震の記録 "The Great Earthquake of Japan 1891" などがある。

ほとんどの資料が、経年による傷みが激しく、イギリス土木学会では、なんらかの修復をする予定とのことである。整理を含めて日本側からの支援も望まれるところである。

なお今回の調査では、イギリス土木学会図書館長のM.クライム氏、およびアーカイブスのアロウスマス氏の便宜を受けたことを付記する。

(五十畑 弘)



建設中の布引ダム (1899)

関 連 学 会 ニ ュ ー ス

産業考古学会

1997年度産業考古学会全国大会が、去る8月30日に北海道開拓記念館を会場に開催された。

産業考古学会は、本年設立20周年を迎え、産業遺産の掘り起こしや保存活動に積極的に取り組んでいる。今回の全国大会は、北海道産業考古学会が担当し、青木隆夫氏（夕張市石炭博物館長）による記念講演「北海道の石炭技術史」のほか、18件の研究発表が成された。この中では、北海道の炭鉱と鉄道をテーマとしたセッションが設置されたほか、発電所や舟運についての研究発表もなされるなど、土木史と関係の深い研究成果が公表された。

また翌日は、札幌近郊の三笠市、岩見沢市、夕張市での炭鉱施設跡、石炭博物館などの見学会が催され、翌々日には、オプションツアーとして釧路市の太平洋炭鉱見学会も実施された。

連絡先：〒101-0065 千代田区西神田2-3-5
千栄ビル (株) クオリ気付
Tel & Fax 03-3918-7818

歴史文化学会

歴史文化学会 (Japanese Association of the Studies of Culture and History) は、名誉会長山口昌男、顧問佐佐木綱、会長廣川勝美で1997年4月1日に発足した学会である。

設立の趣旨は、以下のようなものである。

21世紀を目前にひかえて歴史転換の大きなうねりが近づいている現在、学問・学術をめぐる状況においても新たな変動が起こりつつある。学際的・国際的な視野に立った学問の発展が模索されているところである。それに応えるには、これまでの閉ざされた個別的な専門領域を横断し、学問的関心を共有しうる研究領域の創造が必要である。そのためには、より専門的で同時に統合的な視野と展望、それに基づく課題の設定とその波及が不可欠であろう。(中略)

現代は歴史と文化の終焉と再統合の時代であるといわれる。歴史の古層の掘り起こしの作業なくして人類とその文化の復権はありえないであろう。従来の形骸化された学問に代わる新しい歴史像の確立はますます重要になっているといえよう。(以下略)

簡単にいうならば、知の再編を目指すことを目的として多種多様な領野から人・物・歴史の文化的な根本原理を問おうとするものである。もう少し柔軟な表現をすれば、文科と理科の融合を目指して「まじめに遊ぶ」ことである。これが本学会の設立理由である。

事務局：阪南大学国際コミュニケーション学部
神尾研究室気付
Tel 0723-30-2919 Fax 075-882-4461

技術史教育学会

1997年度技術史教育学会全国大会が、去る11月8日に足利工業大学を会場に開催された。

技術史教育学会は、技術史教育の理論と実践について研究することを目的に、平成7年10月に発足した。今回の全国大会では、一色尚次氏（東京工業大学名誉教授）による特別講演「新熱技術を求めて53年—スターリングエンジンの開発と未来」のほか、9件の研究発表が成された。その中では、大学教育のみならず、社会教育、実務教育の現場で技術史をどのように教えていくかが議論の対象となっており、土木史教育にも大いに参考となる研究成果が公表された。

当日の昼休みには、足利工業大学内の「風車の広場」の見学を行ったほか、翌日には足利市、桐生市における織物技術の足跡を辿る見学会も行われた。

連絡先：〒312 茨城県ひたちなか市中根866
茨城工業高等専門学校機械工学科
勝山昭夫研究室気付
Tel 029-271-2894, Fax 029-273-1939
E-Mail: katuyama@cc.ibaraki-ct.ac.jp

内藤新宿開設三百年記念事業 シリーズシンポジウム第1回 「宿場町から大都会へ」

来たる1998年には、新宿の地名の由来となった甲州街道第一の宿場「内藤新宿」が開設300年を迎えるという。これを記念して、新宿区と地元の企業、各種団体が「新宿300年委員会」を結成、さまざまな記念事業を計画している。その先駆けとなるシリーズシンポジウム第1回「宿場町から大都会へ」が11月6日(木)四ッ谷区民ホールで開催された。講師は、吉原健一郎(成城大学教授)原田勝正(和光大学教授)鈴木 靖(新宿区歴史博物館学芸員)の各氏で、内藤新宿から現在の新宿への移り変わりを、交通の結節点という地域特性に着目し、街道、鉄道、遊興の場等の側面から説き明かしていった。

今後もシンポジウム「街道走破を聞く一旅人にやさしい街道(仮称)」やウオークラリー等が予定されており、新宿300年を検証しながら今後のまちづくりを考えるという行事が続く。

問い合わせ先は、「新宿300年委員会」
Tel 03-3205-9035 Fax 03-3205-9016
ホームページも開設している。
<http://www.city.shinjuku.tokyo.jp/300nen>

学 会 の 動 き

第52回年次学術講演会

第52回年次学術講演会では、第IV部門の「土木史」、共通セッションの「文化財としての土木構造物の評価・保存・活用」が行われた。

第IV部門は8編の講演申込があった。それぞれに対象・時代・方法はさまざまであったが、発表に対して707-から活発に意見が出された。議論を深めるには短い時間であった。

共通セッションは、2部構成になっており、両方合わせて14編の講演があった。

前半は、近代土木遺産を中心とした発表であり、近代土木遺産に対する評価・保存・活用のために、それぞれの地域の特徴を示すことが、課題となった。中でも事例の活用に関する発表では、活用に関する意識の低さが指摘されていた。

後半は、費用算出・構造解析・耐震・意匠等、多岐にわたる発表が行われた。しかし、大半が土木構造物の評価に関する論文であり、保存・活用方策にまで足を踏み込んだ論文が、今後期待される所である。

なお、小委員会の活動報告として研究討論会「土木文化財としての玉川上水」も開催された。

平成9年度・土木史研究委員会構成

委員長 顧問	榛澤 芳雄	日本大学
	新谷 洋二	日本大学
	天野 光三	大阪産業大学
	五十嵐日出夫	北海学園大学
副委員長 委員兼 幹事長 委員	大熊 孝*	新潟大学
	佐藤 馨一	北海道大学
	青木 栄一	駿河台大学
	市川 紀一	中部九州道路メンテナンス
幹 事	今本 博健	京都大学
	浦 勝	九州工業大学
	合田 良實	横浜国立大学
	小西 純一	信州大学
	小林 一郎*	熊本大学
	竹林 征三	土木研究センター
	松村 博	大阪市都市工学情報センター
	渡辺 貴介*	東京工業大学
	平井 典宜*	運輸省
	五十畑 弘	日本鋼管
	伊東 孝祐	国土開発技術研究センター
	亀井 伸雄*	文化庁
	神吉 和夫	神戸大学
	久保田稔男	国立科学博物館
	今 尚之	北海道教育大学
	佐々木 葉*	日本福祉大学
事務局	為国 孝敏*	足利工業大学
	知野 泰明*	日本大学
	福島 二郎	足利工業大学
	藤井三樹夫	水環境研究所
	石郷岡 猛	土木学会

注) *印は、新任。

第20回土木計画学研究発表会

去る11月1日～3日、長岡技術科学大学を会場に、第20回土木計画学研究発表会が開催された。本年は352件の発表を数える中で、例年同様、2つの土木史セッションが設定され、7件の発表が行われた。

近年の土木計画学の研究分野では、従来のモデルや数値処理による計測手法を用いた研究のみならず、土木計画が抱える問題や課題の整理・分析、意識構造の分析や住民意識の計画プロセスへの組み込み方法、成熟化社会での新たな課題への取り組み方法等、研究領域が大きく広がってきている。この背景として成熟化社会に突入したわが国にあって、機能重視で進めてきたインフラ整備手法に対する社会的ニーズの後退と、住民・環境本意の公共事業への社会的ニーズの高まりによるものが大きい。そうした中で、近年、土木史関係の発表が増加傾向にあることは、土木計画の自己点検とアイデンティティの模索のための事後評価システムを求められているものであると考えられる。すなわち、社会的要求が土木計画学の一つの研究領域として土木史的アプローチによる研究スタイルを認知させてきたとも考えられる。

こうした土木計画学分野での土木史研究では、過去の事実・事象に対する人物・地域・社会・制度等との関連をシステムとしてとらえ、そのメカニズムを分析・評価し、そこから将来計画への知見を探ろうとする試みが多く見られる。すなわち、結果として得られている事実とその背景との関係に仮説をたて、仮説の証明を定性的・定量的データで実証し、知見（解）を求める論法（ストーリー）が多く試みられている。そのため、必ずしも、1）一次資料（原典）にあたる、2）事実を発見する、3）筆者の史観に基づいた切り口を提示する、その他の土木史的手法とはそぐわないことも多い。しかしながら、土木史の新たな研究手法の開発への思考錯誤の段階にとらえたと、新しい研究方法へのアプローチとも考えられる。今回の布施らの古地図の研究のように、土木史のための新たなデータを構築・提案されるなど、土木史研究へ一石を投じようような新鮮な研究も見られる。

土木計画学分野では、今後ますます土木史への取り組みが多くなることが予想される。そうした中で、活発な議論がなされることを大いに期待したい。

なお、本年度の土木学会論文賞を受賞された小林一郎教授（熊本大学）が招待講演として「パラダイム・シフトとしてのトゥルノン橋の誕生」を発表された。土木計画学研究委員会が土木史の論文を正に評価されたことであり、大変意義のあることと歓迎する。

土木文化財

土木文化財の現状と文化財登録制度

平成2（1991）年、文化庁は「近代化遺産（建造物等）総合調査」事業を開始しました。ここでは、「近代的手法によって造られた建造物（各種の構築物、工作物を含む）で、産業・交通・土木に関わるもの」を「近代化遺産」としています。具体的には、産業関係では造船所、製鉄所、鉱山施設、製糸工場など、交通関係では駅舎・トンネル等の鉄道施設、道路橋、灯台など、土木関係ではダム、発電所、上下水道施設などが挙げられます。この「近代化遺産総合調査」に基づき、平成5年8月、秋田市の藤倉水源地水道施設と、群馬県の碓氷峠鉄道施設の2件が初めて「近代化遺産」として重要文化財に指定されました。これまでも、旧弾正橋や神子畑鉄橋などが重要文化財に、また小菅ソロバンドックや神子元島灯台などが史跡に指定されてはいましたが、ここに近代の土木建造物が重要文化財の新しい分野として位置付けられたことになります（なお、平成8年2月、重要文化財建造物についての指定基準に「土木建造物」を明示しました）。次いで平成6年12月に桃介橋を含む読書発電所施設が、平成8年12月四日市旧港湾施設が、平成9年5月日本煉瓦製造株式会社旧煉瓦製造施設が重要文化財に指定され、平成9年9月旧横浜船渠第2号ドックが重要文化財指定の答申を受けています。

一方、文化庁では、「近代の文化遺産の保存と活用に関する調査研究協力者会議」の提言を受けて、平成8年6月「文化財保護法」を一部改正し、近代の建造物等を保護するため、指定制度を補完するものとして、現状変更等の届出制と指導・助言・勧告とを基本とする緩やかな保護措置をとる「登録制度」を導入しました。多様かつ大量の近代の建造物等の保存活用を図り幅広く後世に伝えていくためには、指定制度に加えて、文化財保護手法の多様化を図る必要があるとの認識にたつてのことです。登録有形文化財の基準は、築後50年を経たもので、「一 国土の歴史的景観に寄与しているもの」「二 造形の規範となっているもの」「三 再現することが容易でないもの」としています。平成8年12月第一回目の登録を行い、平成9年10月答申の段階で527件の登録を行っています。45都道府県171市町村におよび、建設年代では、江戸期28件、明治期149件、大正期171件、昭和期179件となっています。

登録有形文化財のうち主な土木施設を下表にまとめておきます。

登録有形文化財527件中、建築物449件に比し、土木構築物は24件（4.5%）にとどまっているのが現状です。歴史的土木構築物の現存所在調査が、建築物のように進んでいないこともその原因のひとつでありましょう。文化財登録制度が未だ土木の分野で浸透していないこともあるようです。文化財登録制度は、建造物を活用していくことが保存につながるという観点にたっていますが、現用の土木構築物では将来の計画を慮って登録でも逡巡することが多いようです。また、なによりも、土木を文化ととらえる視点がいままで希薄であったことが影響しているようにも思われます。土木学会では土木史研究委員会を中心に20数年来にわたり土木史研究と土木文化財の普及に努めてこられたことに敬意を表するとともに、土木学会におきましては、日本建築学会の「日本近代建築総覧」（1980年）に相当する歴史的土木構築物全国リストの早期作成にあたられ、土木構築物の登録促進にご協力賜りますようお願い申し上げます。（文化庁建造物課 堀 勇良）

（関連記事：土木史フォーラム No.6, 1997.8, p.5）

所在地	施設名
茨城県水戸市	低区配水塔
群馬県桐生市	水道施設
神奈川県横浜市	西谷浄水場施設
富山県入善町	旧下山発電所
高岡市	旧配水塔
山梨県勝沼町・大和村	勝沼堰堤
勝沼町	祝橋
甲府市	平瀬浄水場施設
都留市	駒橋発電所落合水路橋
大月市	八ツ沢発電所一号水路橋
芦安村	芦安堰堤
富士吉田市	鹿留発電所うそぶき水路
岐阜県南濃町	羽根谷砂防堰堤
静岡県静岡市・岡部町	宇津ノ谷隧道
三重県上野市	水道施設
大台町・大宮町	旧舟木橋
広島県大竹市	阿多田島灯台資料館
徳島県徳島市	佐古配水場施設
香川県大野原町	豊稔池ダム
福岡県・佐賀県	筑後川昇開橋
福岡県筑紫野市	旧九州鉄道城山三連橋梁
大分県竹田市	明治岡本井路
竹田市	若宮井路笹無田石拱橋
別府市	朝見浄水場施設
宮崎県清武町	黒北発電所

IPHS（国際都市計画史学会）

第8回国際大会開催のお知らせ

開催地：ニューサウスウェールズ大学
（オーストラリア、シドニー市）

期 間：1998年7月15～18日

全体テーマ

The 20th Century Urban Planning Experience

基調講演：ピーター・ホール氏
（ロンドン大学教授）

なお、論文の概要提出は '97年12月1日で締め切られた。本会議に関する問い合わせ先は以下のとおり。

Dr Robert Freestone
Faculty of the Built Environment
University of New South Wales
Sydney NSW 2052 Australia
Ph: +61-2-9385-4836 Fax: +61-2-9385-6264
E-mail: iphs98@unsw.edu.au

土 木 史 関 係 図 書

『愛知の歴史街道』

愛知県の街道を徹底的に追及した貴重な労作である。県史にある明治12年街道表の31路線と、その他の街道8路線を、新旧の地図と写真を使ってリポートしている。編集・執筆は主に県内各地に住む郷土史家によって組織されている「愛知古道研究会」のメンバーの支援の元に進められた。挿入された明治20年の愛知県地図（1/20万）、江戸時代の三河国絵図、尾張国絵図などは貴重であるとともに、見ていて楽しい。

書 名 『愛知の歴史街道』
B5判494頁

著 者 中根 洋治

発行所 愛知古道研究会
平成9年2月

お問い合わせは、愛知県豊田土木事務所
建設一課長 中根 洋治 氏あて
TEL 0565-35-1311（代表）
FAX 0565-35-1648

編集後記：今回は、土木史研究が盛んに行われている現状をお知らせするとともに、フォーラムで長弘先生に土木工学を学ぶ学生への土木史の大切さをご教授いただきました。また、土木史の現状を学ぶものとして、土木施設の改修・補修など紹介しました。
第6号土木史フォーラムで村松貞次郎先生のお名前を誤植しました。ここに深くお詫び申し上げ、訂正いたします。

土木学会土木史研究委員会監修
土木史フォーラム No. 7
発行者 土木史フォーラム小委員会
代表者 武部健一
事務局 日本大学理工学部 小山茂
〒274 船橋市習志野台7-24-1
TEL 0474-69-5219/FAX 0474-69-2581
E-mail: koyama@trpt.cst.nihon-u.ac.jp

CONTENTS

- NEWS
Apt Raod -Usui Renaissance Trail- (KONISHI Junichi)
- FORUM
Education of civil engineering history (NAGAHIRO Yuji)
- LOCAL NEWS
Old course of the Abukumagawa river
Repair work of historical Nunobiki Dam damaged by the earthquake
- OVERSEAS NEWS
Japanese engineering references of ICE Archives
- OTHER INSTITUTIONS
Japan Industrial Archaeology Society
Japan Society of Education for History of Technology
Japanese Association of the Studies of Culture and History
Shinjuku Tercentenary Committee
- REPORT FROM CHSCE (Committee on Historical Studies in Civil Engineering)
The 52nd annual conference
The 20th conference of Infrastructure Planning and Management
- HERITAGE REGISTRATION SYSTEM
Issues on civil engineering heritage (HORI Takeyoshi)
- WHAT'S ON
8th International Conference of International Planning History Society
- BOOK GUIDE